

9月に向けて

代表取締役 三田雅憲

まだまだ残暑厳しい折ですが、彼岸入りまで頑張っていきましょう。本日は、「私立大学の危機を生き抜く」と題して、神奈川大学の戸田学長のインタビューから学びたいと思います。

①…インタビュアー ㊦…戸田学長

①「今年4月、財務省が2040年を目標に「私立大学250校(現状の40%)削減案」を公表し、関係者に衝撃が走りました。どのようにご覧になっているのでしょうか？」

㊦「少子化による十八歳人口と受験生の減少で、私立大学の経営が困難に陥ることは以前から皆、わかっていました。目の前に危機があるにもかかわらず、なかなか改革の機運が醸成されてこなかったという状況があります。いくら「危機感を」と訴えても、なかなかマインドチェンジが出来ないのが人間です。とりわけ残念ながら、教員の側にその傾向があります。幸いにも今回、財務省から厳しい削減案が打ち出されたことで、いままで「うちは大丈夫だろう」と高を括って(※1)いた人も「いま本気で改革をしなければ、母校がなくなってしまう」という言葉に耳を貸してくれるようになりました。これからが勝負だと考えています。また、大学の評価は受験生、社会が決めるものであり同じ偏差地帯なら「キャリア形成に力を入れ、就職の良い大学」と認めていただけるような差別化がないと、生き残りは困難です。教育もまたサービス産業であることを認識しない限り、社会から「選ばれる大学」にはなりません。」

①「少子化時代の波を生き抜く上で、教職員の努力や在校生の活躍だけでなく、若い人に一番伝えたい事をお願いします。」

㊦「人間万事塞翁が馬(※2)で人生、理想や計画通りに事が運ぶことはありません。それでも、目の前のことに死ぬ気で取り組んでいれば、誰かが必ず見てくれている。もちろん誰も見ておらず、救われないこともあります。しかし、少なくとも必死にならない人間にはチャンスは来ない。そのことを私は身に染みて感じてきました。与えられた仕事だと思ってやる気を失うのではなく、全力で取り組めば、思いもよらない道が開けて未来が見えてくる。私自身、学長になるなどとは微塵も予想しなかった人間として、いま若い人たちに一番伝えたい事です。」

(※1) 大したことがないと見くびること

(※2) 人生における幸、不幸は予測ができないことなので、安易に喜んだり悲しんだりするべきではないということ。

先日、朝礼にてお伝えしましたニーチェの思想「脱皮しない蛇は死んでしまう」という考えから、人間や組織は成長や変化する環境を受け入れ、古い価値観や思い込みを更新することの必要性を学びました。この考え方と今の大学をはじめとする学校教育に関しても同じことが言えるかもしれません。自分の頑固な価値観を相手に押し通し続けるのではなく、相手の立場になって考えてみる。あるいは相手の新しい価値観を理解するという、ある種の寛容さや変化を恐れない勇気も、私たちには必要とされているように感じました。会社も同様です。社会をはじめ、お客様や仕入先そして、社員からも「選ばれる会社」にならなくてはなりません。その為には戸田学長が述べられた、与えられた仕事に全力で取り組めば、思いもよらない道が開けて未来が見えてくる。このようにしていかなばと改めて考えております。社員諸君もぜひこの気持ち忘れずによりしくお願いします。